

浜松市における余暇圏の構造

高橋 伸 夫・高林 清 和

I はじめに

従来、人文地理学は人間の生活様式の諸形態を主として研究対象とし、それらを空間に投影して研究がなされてきた。しかし、研究の主要な部分が、人間の生産的な労働に向けられてきたため、人間が生産活動から離れて行動するプロセスを研究対象とするものは、比較的少数であった。現在は、都市化の進展に伴って余暇の大衆化が進み、余暇活動もまた人間の生活様式にとって重要な側面になってきている。

また、従来の伝統的な地理学では人間の問題はまったく欠落していた¹⁾が、現在における地理学の主要な研究の対象は、人間の行動のプロセスをいかに取りあつかうかが重要な課題の一つになっている²⁾。そして、あらゆる空間は組織化されている³⁾と考える場合、人間の余暇活動によっても空間が組織化されうる。余暇活動が、日常の生活空間の範囲から離れて、空間的な移動を伴って生じるとすれば、人間の余暇行動に応じて空間的なまとまりが形成される。本研究は、人間の余暇活動を、その活動主体の側面から空間的な移動形態に焦点を合わせて、移動によって生じる空間の組織化を、人間の生活リズムと居住地区の相違に対応させながら、余暇活動による時・空間的な構造を解明しようと試みるものである。以上の視点により、本研究の目的を以下のように定めた。

- 1) 同一都市圏内において、都市中心部から都市の外縁部に向かうに従って、各々の居住地区の住民がいかに余暇圏を形成しているか。
- 2) 人間の余暇活動が1日、1週、1年という生活リズムに対応して、いかに余暇圏を形成しているか。

本稿では、余暇活動がなされる範囲の空間を余暇圏と名づけ、また、余暇とは、生活を構成するさまざまな行動のうち、拘束時間・生理的必需時間を除く、残余時間という時間的領域をうめる諸活動⁴⁾と規定する。

余暇活動に関する従来の地理学的研究は、余暇活動がなされる観光資源について扱ったものが、そのほとんどであった⁵⁾。温泉集落、観光都市の景観・構成を論じたもの⁶⁾⁷⁾。観光地の立地論的研究⁸⁾、観光地の観光資本⁹⁾、開発意図から形成過程を分析したもの¹⁰⁾¹¹⁾¹²⁾、および近年発達の著しい民宿地域の形成過程を論じたもの¹³⁾¹⁴⁾¹⁵⁾、さらに都市化の営力を観光化と対応させて分析したもの¹⁶⁾などがある。その他、観光地域計画、観光環境保全に至るまでテーマが広がる一方、観光地の地域的特性が、その形成・機能・形態・構造などの視点からの分析によって、次第に明確にされてきている。しかしながら上記の研究は、いずれも特定の観光資源、観光施設等の観光地を対象とした分析であり、それらを利用する主体に視点をおいて、観光活動による地域的移動の形態を捉えようとす

第1表 余暇活動の類型

サイクル	余暇時間	余暇活動	指標	本稿での分類
一日	平日余暇時間 (就業後など)	平日余暇活動	パチンコ・飲食店	平日余暇活動
一週	単休余暇時間 (日曜日・祭日など)	週末余暇活動	近隣公園, 都心部繁華街, 周辺行楽地	観光型余暇活動
		行楽余暇活動	日帰観光地	
		一泊余暇活動	一泊観光地	
一年	長期余暇時間 (有給休暇など)	連泊余暇活動	連泊観光地	

る研究は数少なかった。わずかに、小池洋一の大阪住民のレクリエーション形態をその移動範囲の分析からレクリエーション景観の圏構造的配置を論じた¹⁷⁾ものや、同様な方法で名古屋市の事例を論じた坂井雍子¹⁸⁾の研究があるのみである。上記二者による研究では、余暇活動の主体を都市内居住者に限って論じているが、1960年代後半の急速な都市化の進展は、その活動主体を都市圏という広域的な広がりの中へ拡大しつつある。

外国に余暇活動に関する研究例を求めると、Paul-Henry Chambart De Lauwe¹⁹⁾ は都市内の余暇活動に研究の焦点を合わせて、人間の行動を時・空間的にとらえようとしている。すなわち、パリにおける余暇活動は、青少年層の映画鑑賞という週単位の地域的現象が存在することを明らかにしている。また、Thomas F. Saarinen²⁰⁾ は、日々の通勤によって社会的なリズムが生じることを論じ、局地的な喫茶店、商店、レストラン、スポーツクラブ、美容室等が、日々の余暇活動の中心になり、ひいてはコミュニティの結節点になることを述べている。そして、このような分析が今後の都市計画に役立つことをも示唆している。以上のように、外国においては都市内の余暇活動の時・空間的研究が進められているが、研究例は数多くなく、今後に残された問題が多い。

余暇活動は、前述の通りすべての残余時間内に営まれる活動を示すが、その活動形態はおおむね1)状態を変えるものと、2)場所を変えるものとの2種類に区分することができる。本稿の目的が、余暇時間内での人々の移動をとらえることから、余暇時間内の場所を変えるもの、つまり、多かれ少なかれ距離的移動を伴って行われる活動を余暇活動の対象として取りあつかう。また、余暇活動は、人間の1日、1週、1年という生活リズムに対応した余暇時間に応じて、それぞれ異なった活動形態が営まれ、それらは以下の3つに大別できよう。

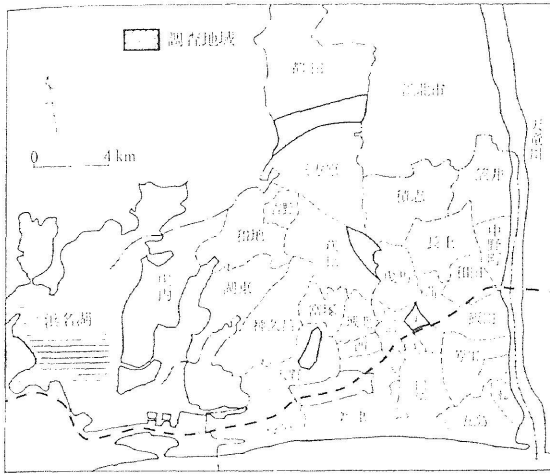
- (1) 就業後の時間を使って、週に何回か行われる週単位の活動。
- (2) 日曜日などの定期的な休日時間を使って、月に何回か行われる月単位の活動。
- (3) 日曜日や有給休暇、そして盆・正月休みなどの休日時間を使用して、年に何回か行われる年単位の活動。

本稿では、上記の諸活動を(1)平日余暇活動、(2)週末余暇活動、そして(3)観光型余暇活動という用語で表現し、生活リズムに対応した余暇活動として分析した。なお、日帰の行楽活動は、日単位の活動というよりも、年単位の活動に近似するため、分類上、観光型余暇活動に含めた。また、余暇活動の中で活動の種類が多くなるものについては、以下の基準を設けて、いくつかの指標を

選定した。

- (1) 比較的多くの人々が行う活動であること。
- (2) その活動地が、小単位で完結される地域であること。
- (3) その活動地へは、特定の人だけでなく、誰もが行き得ること。

予備調査²¹⁾を行った結果、平日余暇活動については、飲食店とパチンコ店での余暇活動、週末余暇活動については、近隣公園、浜松市中心繁華街、周辺行楽地での余暇活動、そして観光型余暇活動については、日帰観光地、一泊観光地、連泊観光地での余暇活動を、それぞれ指標に選定した。



第1図 調査地くと浜松市内の地区名

次に、居住地に応じて余暇活動に地域性がいかに存在するかを考察するために、浜松都市圏の中心部から、都市化の進展の段階に対応して、都市の中心部、郊外住宅地区、周縁部の農村地区の3地区を選定した。本稿では、それらを中心地区、郊外地区、農村地区と呼称し、実際には浜松市の東地区、萩丘地区、都田地区の3地区を調査対象とした。研究対象に選定した浜松市は、東海道メガロポリスのほぼ中央に位置し、静岡県西部にあって県下最大の人口482,288²²⁾を有している。都市圏は、市中心部から放射状に伸びる主要幹線道路を中心にして

拡大し、主要な市街地は後方の三方原台地へ扇状形に広がっている。

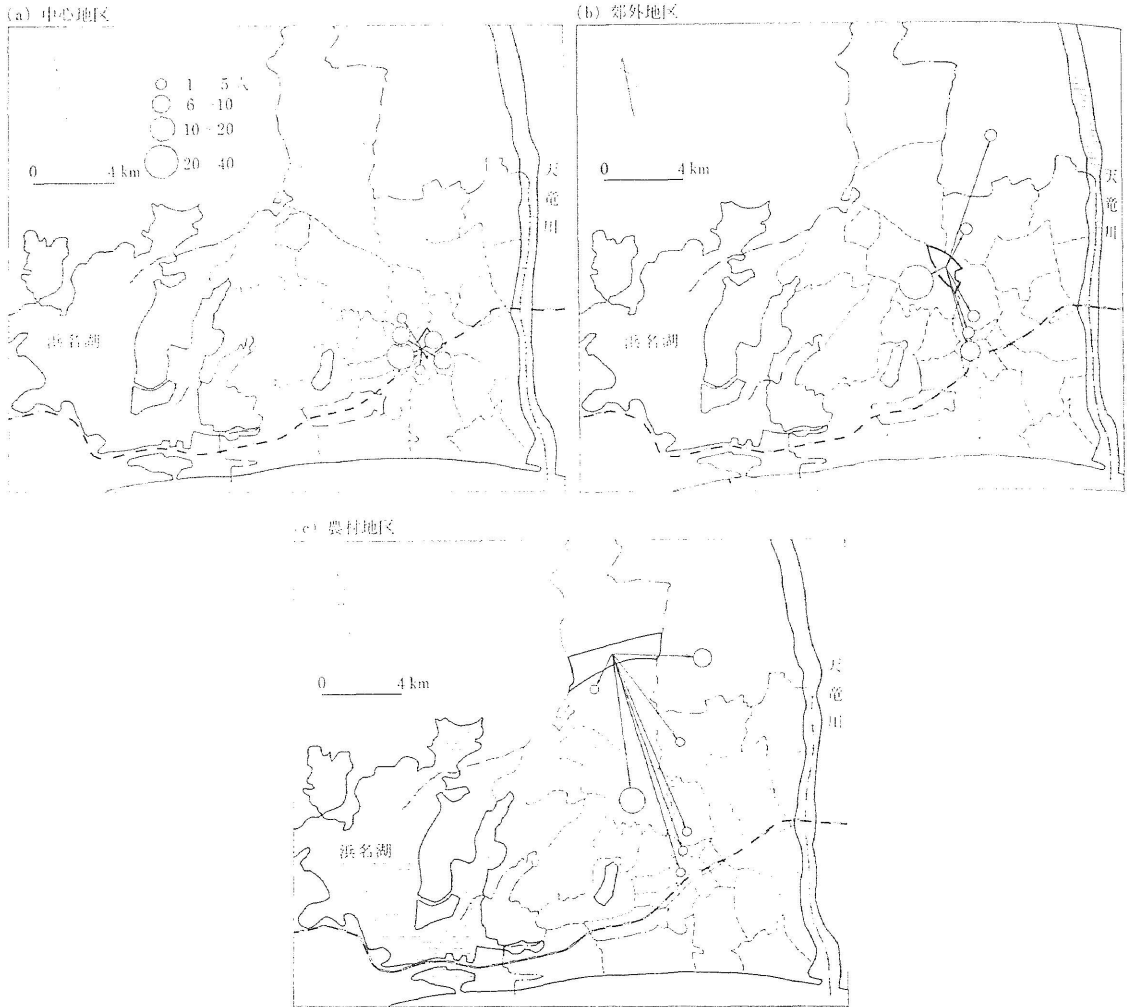
研究対象地域において、1974年11月5日にアンケート調査を実施した。上記の各地区より小学校をそれぞれ一校ずつ選出し、高学年の児童を通じて調査票を各家庭に配布し、児童の父親に過去1年間の余暇活動の実績について記入を求めた。その調査では各校60枚ずつ、合計180枚配布し、回収率は74.4%であった。

II 平日余暇圏の構造

平日の就業後、人々がいかに余暇活動を行って、地域的に余暇圏を形成しているかを、居住地区ごとに考察する。その場合、人々の平日における地域的な移動は、余暇活動によることよりも、むしろ職業上の日々移動（通勤など）によるものと考えられる。したがって、職業上の地域的な日々移動を考慮に入れて、居住地と勤務地とが同一の者（農業従事者を含む）と、居住地と勤務地が同一でない者との2種類に大別し、それぞれ自営者、通勤者という用語で表現した。

II-1) 中心地区

まず、自営者の平日余暇活動による地域的な移動をみると、この地区の居住者は浜松市の中心市街地に近接するため、活動地はほとんどが居住地の周辺に集中する。浜松市中心市街地で余暇活動を行わない者は、元浜・東・江東の各地区で余暇を過ごす。これらの3地区とも、市中心部に位置してい



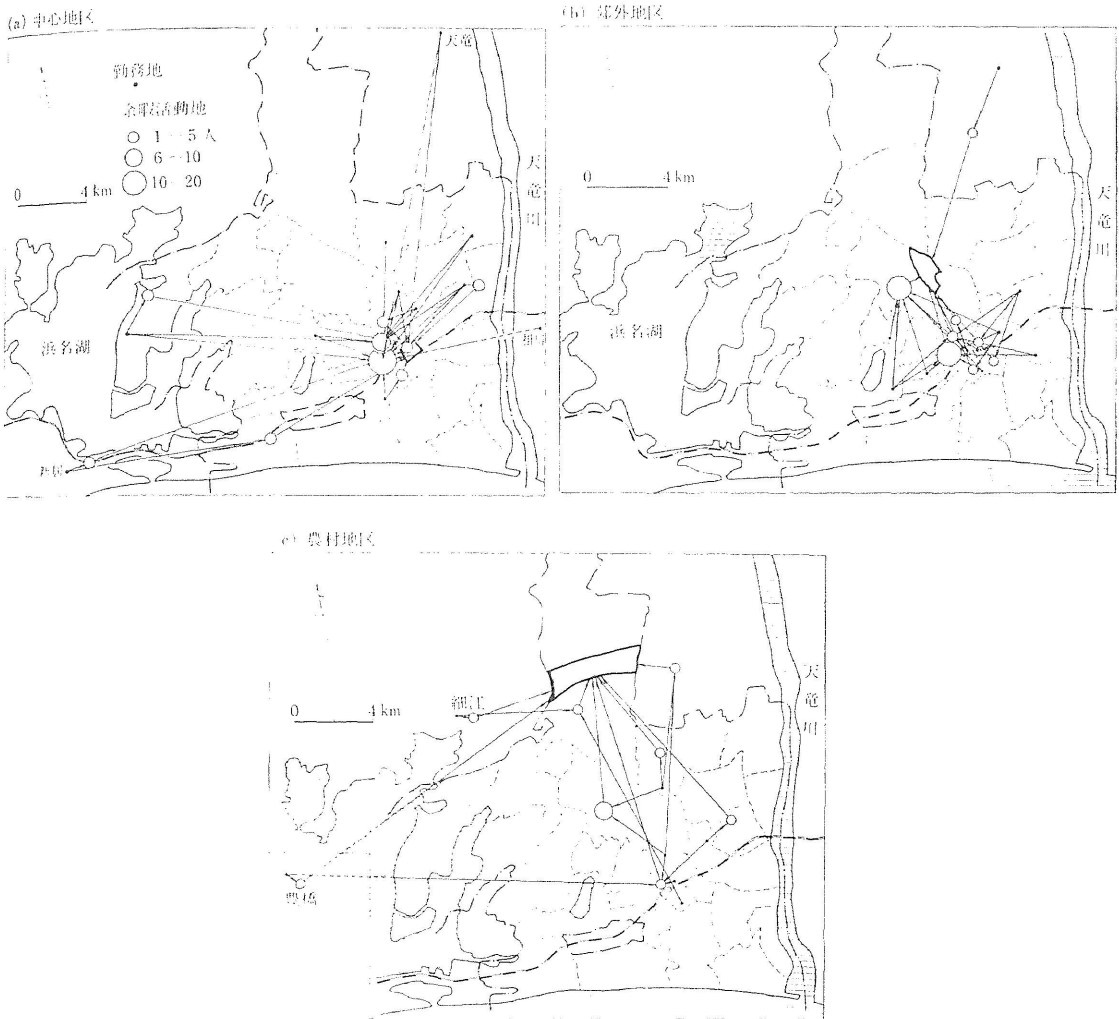
第2図 平日余暇圏（自営者による）

る。そのため、当地区の自営者は、他地区のそれに比べて、とくに狭い範囲で余暇圏が完結している。

通勤者の地域的移動をみると、自営者と同様に中心市街地での活動者が圧倒的に多く、その他の活動地も中心市街地の周辺に位置するものであり、日々の余暇活動は狭い範囲に完結している。当地区の通勤者が勤務地から余暇活動地を経由して、いかに居住地にたどりつくかを追跡するために、勤務地と余暇活動地を当地区に結びつけて考察すると、余暇活動地は、全て勤務地と居住地との中間に位置する。これは、通勤者が就業後帰宅に際しより便利な活動地を選択することを示している。しかも、当地区は中心市街地に近接しているため、通勤者の余暇活動地は、勤務地と居住地との中間ではあるが、より居住地に接近している。

II-2) 郊外地区

自営者の平日余暇活動の地域的移動をみると、萩丘地区と市中心市街地に集中する。このことは、中心地区と同様に居住地により近いところが選好される傾向にある。したがって、当地区の自営者の



第3図 平日余暇圏（通勤者による）

平日余暇活動は、余暇対象物のより集積の高い市中心市街地よりも居住地に近い萩丘地区に集中する。

通勤者の平日余暇活動の地域的移動をみると、余暇活動地は、中心地区と同様に勤務地と居住地の中間に位置している。ただし、中央・西・駅南地区に勤務するものは、それぞれの余暇活動地が市中心市街地と萩丘地区に分流する。そして、自営者の場合と異なって、通勤者の余暇活動地は、市中心市街地と萩丘地区がほぼ同数である。その他、駅南地区を平日余暇活動地として選好する者は、駅南方面への通勤者であり、同様なことは、江東地区へは江東・和田方面への通勤者が、貴布祢地区へは浜北市への通勤者が平日余暇活動地として選んでいることである。興味あることとして、通勤地と余暇活動地が一致することが少なく、通勤地と居住地の間に、つねに余暇活動地が存在することである。このことは、中心地区と農村地区も同じ傾向にある。

II-3) 農村地区

自営者の地域的移動をみると、その活動地は、居住地から市中心市街地までの範囲に完結してい

る。とくに、居住地周辺の萩丘と貴布祢両地区での余暇活動が多数を占める。貴布祢地区は、浜北市に位置するが、浜北市の行政の中心地であり、余暇活動の諸施設を集積させて繁華街を形成している。そのため、浜松市北部に居住する者の平日の余暇活動を吸引するようになっている。自営者の平日余暇活動の選好に当っては、居住地からの距離の因子が大きく影響を与えている。そのため、居住地から近距離の活動地が選ばれる。

通勤者の地域的移動をみると、中央・駅南・蒲各地区と豊橋市に勤務する者は、帰宅の経路で市の中心市街地を通過するため、そこでの余暇活動をなす者が大半である。ごく少数の者だけが三方原地区で余暇活動をなす。平日の余暇活動が勤務地と居住地の中間で完結されるのは、距離が大きく影響することは勿論であるが、通勤という日々移動の結果、通勤経路周辺の空間を認知する機会が増大し、そのため余暇活動地として、容易に選好するためであろう。また、当地区の場合、居住地から国鉄浜松駅までバスで1時間余り所要し、しかもバスの本数が少ないために、他地区でみられたごとく、市中心市街地以外へ立ち寄ることができないという、交通機関の制約も平日余暇圏の形成に左右している。また、蒲地区の勤務者は、和田地区を余暇活動地とし、同様に細江地区の勤務者は細江地区へ、積志・曳馬地区の勤務者は、積志・貴布祢・萩丘地区へそれぞれ立ち寄るが、上記のいずれの場合にも、帰宅経路上の活動地である。

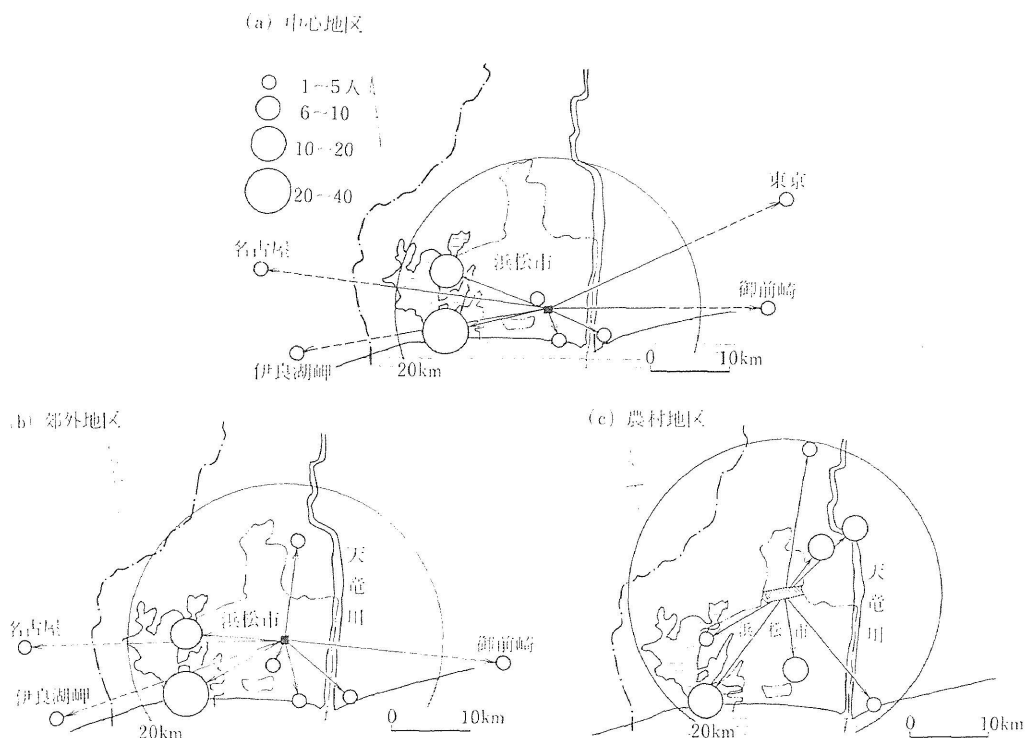
以上のように、中心・郊外・農村3地区に居住する者の平日余暇圏を考察したが、通勤者による平日の余暇は、就業後に帰宅までの間でなされるため、平日余暇圏の範囲は通勤圏の範囲にほぼ近似しそれよりも狭小であるといえよう。ただし、平日余暇圏の内部には、浜松市内では都心地区や萩丘地区、そして元浜地区のように、平日の余暇活動によっていくつかの結節地点が形成されており、概して、それらの結節地点は平日の余暇活動においては近隣地区から人々を吸引している。

Ⅲ 週末余暇圏の構造

本章では、日曜日などの定期的な週単位の休日に、いかなる場所で余暇活動を行うかを、前述した3つの指標、すなわち居住地周辺の近隣公園、浜松市都心地区、そして周辺行楽地を取りあげ、居住地区ごとにそれぞれの活動地を考察する。

Ⅲ-1) 中心地区

中心地区においては、浜松市都心地区に近接していることから、週末に都心部繁華街へ向かう者が多い。都心地区へ行く者の数を3地区間で比較すると、中心地区が最も高率を占める。また、当地区から周辺行楽地へ出かける者の比率が36.8%に達し、この値も3地区中で最高になる。このため、中心地区に居住する者が、週末に最も長距離の移動を行うことになる。最もよく選好される行楽地は、弁天島と館山寺である。両者は浜名湖に面しており、夏季の海水浴をはじめ、遊園地・フラワーパークなどの大規模レジャー施設と広大な緑地が保存され、さらに年間を通じて魚釣りの適地として、市民の格好な週末余暇活動地になっている。浜名湖周辺のこの地区は、中心地区のみならず郊外・農村両地区の居住者も吸引している。以下に述べるような、遠距離の行楽地を除けば、週末余暇活動地は浜名湖を中心とする遠州地方にあり、全活動者の84.6%がこの範囲内で週末の余暇活動を完結してい



第4図 週末余暇圏

る。上記の範囲とは、当居住地区を中心にして半径20 km の円内であり、所要時間は約60分以下の近距離である。

当地区の週末余暇圏の形状で特徴的なのは、浜松市の北部方面への活動者が少ない代わりに、御前崎・伊良湖、さらには名古屋・東京などの遠距離の行楽地を選好する者が多いことである。道路網の整備や東海道新幹線などの高速交通機関の発達により、時間距離が大幅に短縮し、週末余暇圏が一段と拡大したものと考えられる。一方、当地区から近隣公園へ出かける者は26.3%と3地区のなかでは最低の割合である。

Ⅲ-2) 郊外地区

通勤者の割合が高い当地区で特徴的なことは、週末余暇活動地として近隣公園へ行く者の比率が圧倒的に高く、ほぼ半数の49.4%に達する。続いて周辺行楽地31.6%，市都心地区を活動地とする者が

第2表 週末余暇活動地への活動者数

居住地区	活動地	近隣公園	浜松市都心地区	周辺行楽地
総数	100.0 %	37.5 %	28.4 %	34.1 %
中心地区	100.0	26.4	36.8	36.8
郊外地区	100.0	49.4	19.0	31.6
農村地区	100.0	35.7	30.4	33.9

アンケート調査の集計による。

19.0%であり、両者とも3地区中最低の値である。上記の特徴的な比率は、平日余暇活動と関連すると考えられる。すなわち、平日における地域的移動量の多い通勤者にとっては、週末は距離的に移動しない余暇活動地を選好し、その結果、相対的に週末余暇圏が狭小になる傾向があると考えられる。

周辺行楽地のうち、活動者が多いものは中心地区と同様に弁天島・館山寺である。その他、中心地区の居住者が選好しなかった浜松市北部への活動者が現われる。また、中心地区に比較しては少数であるが、御前崎・伊良湖・名古屋などへの活動者もあり、週末余暇圏は広範囲を被っている。しかし、その結節地点は浜名湖を中心にした遠州地方であり、当居住地区を中心にして半径20km、所要時間約60分の範囲内に、当地区の全活動者の91.3%が包含されている。

III-3) 農村地区

農村地区においては、浜松市都心地区(30.4%)、近隣公園(35.7%)、周辺行楽地(33.9%)と3者がほぼ同数を占めている。上記の3者のなかでは、近隣公園の占める割合が高く、週末余暇活動も居住地に近接した地点が選ばれ、この傾向は中心・郊外の他2地区とも同様である。しかも、当地区の居住者が行楽地として選んだものは、すべてが近距離のものである。

当地区で特徴的な点は、郊外地区と比較して浜松市都心地区へ出る者の比率が、11.4%も多い点である。当地区の居住者は平日余暇活動において、中心・郊外両地区に比較して都心部に行く機会が少なく、週末余暇の活動として都市的環境を強く志向するものと考えられる。最も多く選ばれる周辺行楽地は、中心・郊外両地区と同様に、浜名湖の弁天島である。しかし、それに続くものが、浜北森林公園と鳥羽山公園であり、これらの周辺行楽地は居住地区に近接しているものである。

中心・郊外両地区でみられた伊良湖・御前崎・名古屋・東京への活動者は皆無であり、当居住地区を中心にして、半径20km、所要時間約60分の範囲に、すべての活動地が入る。したがって、農村地区の週末余暇圏の大きさは、中心・郊外両地区のそれに比較して小さく、週末余暇圏の面積は、都心部から農村部へ向かうほど小さくなる傾向がある。

また、週末余暇圏の形成は、平日余暇圏のそれとの関連が深く、人々は一般に、平日の余暇活動が行えない場所に、週末の余暇活動を求める傾向がある。すなわち、中心地区の居住者は、周辺行楽地を活動地として選好する者が最も多く、郊外地区の者にとっては、平日行く機会の多い浜松市都心地区より近隣公園を選好し、同様に農村地区では平日行く機会の少ない都心地区を週末余暇の活動地として選ぶ者の比率が高くなっている。

IV 観光型余暇圏の構造

筆者達は、日帰観光活動と宿泊観光活動が季節的または年単位の活動であると予想したが、今回のアンケート調査の結果(第3表)から、以上の予想は妥当であることがわかった。このような観光型余暇活動は、前章で考察した平日余暇活動や週末余暇活動と異なって、日常の生活空間から離れて大きな距離を伴って移動する活動であり、その範囲は日本全国から海外まで広く及んでいる。以上のように、観光型余暇活動は回数が少ないため、活動地は一カ所に集中することなく広範囲にわたって散在している。そのため、本稿が目的とする居住地の相違による観光型余暇圏の形成の相違を見出す

第3表 日帰・一泊・連泊余暇活動の回数

a) 日帰余暇活動回数		回数										平均回数
居住地区		0回	1回	2回	3回	4回	5回	6回	7回	8回	9回	
総	数	16人	19人	15人	15人	17人	18人	10人	9人	7人	8人	3.8回
中	心	2	5	4	3	7	8	2	6	5	3	4.7
郊	外	6	7	4	5	4	7	4	1	1	5	3.8
農	村	8	7	7	7	6	3	4	2	1	—	2.8

b) 一泊余暇活動回数		回数							平均回数
居住地区		0回	1回	2回	3回	4回	5回		
総	数	23人	49人	22人	23人	6人	11人	1.8回	
中	心	4	18	8	7	3	5	2.0	
郊	外	7	14	7	9	2	5	2.0	
農	村	12	17	7	7	1	1	1.4	

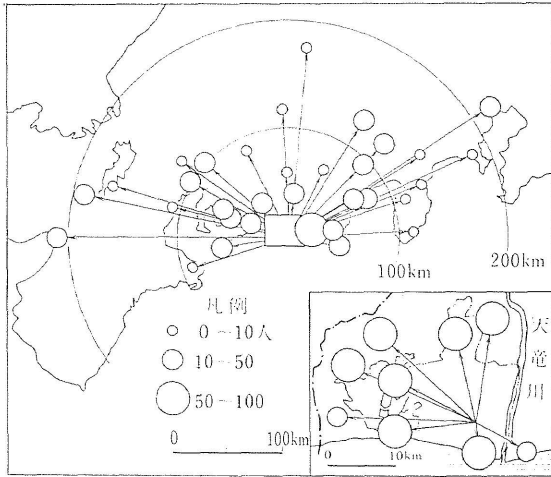
c) 連泊余暇活動回数		回数				平均回数
居住地区		0回	1回	2回	3回	
総	数	98人	22人	12人	2人	0.4回
中	心	31	7	7	—	0.5
郊	外	32	7	3	2	0.4
農	村	35	8	2	—	0.3

ことは、極めて困難であった。ただし、第3表が如実に示すように、日帰・一泊・連泊いずれの観光活動も、平均すると農村地区から郊外地区そして中心地区に向かうほど、それぞれの活動回数が増加する。本章では、中心・郊外・農村の3地区の居住者を合わせて、日帰余暇活動・一泊余暇活動・連泊余暇活動が形成する余暇圏を考察する。

IV-1) 日帰余暇圏

浜松市に居住する者が、余暇活動地として選好した場所が、日帰余暇の対象としたり、あるいは宿泊を伴う余暇の対象としたりする。そのため、本稿では同じ活動地が日帰余暇圏・一泊余暇圏・連泊余暇圏のうち一つ以上に入る場合もあるが、それはアンケート調査で活動者の回答に従って上記の3つの圏に分類したためである。

各観光地ごとに、それぞれの活動者数をみると、浜名湖周辺に集中し、とりわけ館山寺(100人)、弁天島(94)、奥山(72)、瀬戸(66)に多い。とくに、館山寺へは過去1年間に4人中3人の者が行ったことになる。その他、遠州地方ではゴルフブームの影響によって、ゴルフ場をもつ湖西・天竜川河口・滝沢での活動者が増えている。駿遠地方では、遠州三山(可睡斎・油山寺・法多山)への活動者が多いが、この地区は浜松市居住者の正月の初詣の場所として名高く、したがって日帰活動者のうち大半が初詣の場所として選んだと思われる。その他、海水浴場を完備した御前崎(34)、静岡地方では日本平・三保(37)に集中するが、静岡市(26)への活動者は比較的少ない。三河・名岐地方で



第5図 日帰余暇圏

に負うことが大きい。

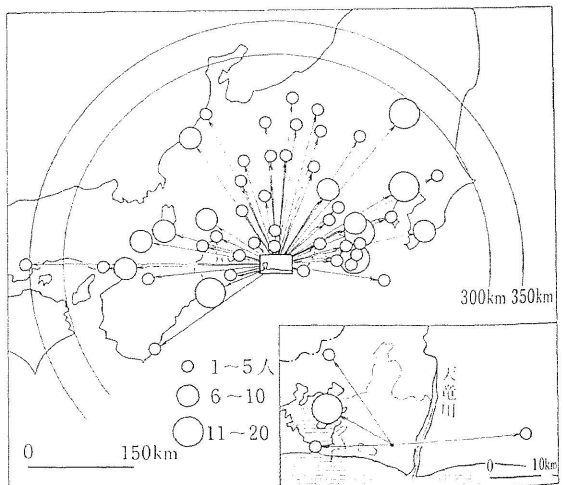
また、日帰余暇活動は、1日で完結しなくてはならないという時間的制約があるため、人々が活動地を選好する際に、目的地までの所要時間²³⁾が大きな要因となる。そこで目的地までの所要時間別に、それぞれの活動者数を算出すると、所要時間90分以内の活動地を全活動者の65.5%が選好し、120分以内の活動地には88.3%の活動者が選んでいる。そして240分以内の範囲にすべての活動地が位置していることがわかった。

IV-2) 一泊余暇圏

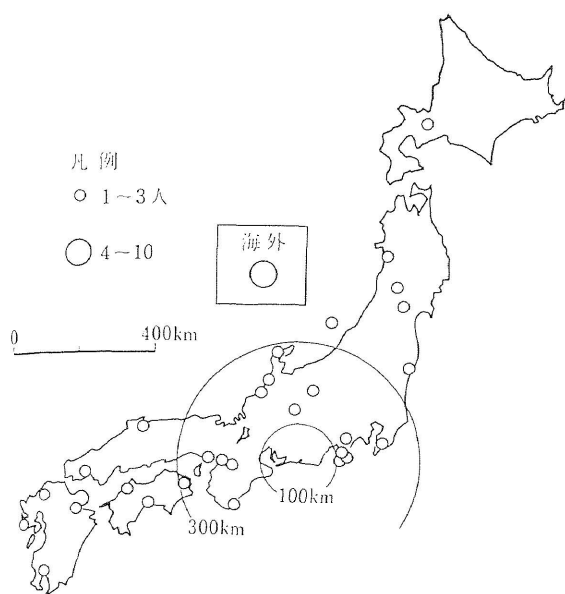
活動者が多い一泊型観光地は、館山寺(17人)、伊豆箱根(17)、熱海(13)、東京(13)、伊勢鳥羽(11)、日光(11)などである。館山寺には、鉱泉を利用した館山寺温泉があり、大型宿泊施設が完備し、浜松市民のみならず、関東・関西地方から宿泊観光者を吸引している。伊豆箱根と熱海も同様に、温泉を伴った観光地である。その他、北陸地方では、芦原・山中・片山津の加賀温泉地に活動者が多く、一泊型観光地の観光対象として温泉保養が優位を占めることがわかる。その他、岡山にも活動者がみられるが、東海道新幹線などにより、所要時間が従来に比べて大幅に短縮された結果、一泊余暇圏の飛地現象が生じたものと考えられる。以上の一泊余暇圏の範囲は、浜松市から直線距離で350km、所要時間380分以内にはほぼ一致し、中部圏に主要部分が含まれる。中部圏以外では、阪神圏よりも首都圏へ一泊余暇圏が伸長し、その他、高速輸送機関の発達により、一泊余暇圏の飛地現象がみられる。

次に浜松市から観光地までの所要時間別に活

は、名古屋市(30)、豊橋市(27)が多く、都市観光の重要性がうかがえる。富士箱根地方では、富士西麓(39)に多いが、この地区には富士五湖の自然的観光資源とともに、富士急ハイランド、日本ランド、富士見ランドといった大型の遊園地がある。以上の観光地は、浜松市から直線で約100km圏内に位置している。しかし、日帰余暇圏の範囲は、東は東京都、西は大阪市、北は松本市まで、浜松市から直線距離で約210kmの範囲に及ぶ。このように日帰余暇圏が飛地状に拡大しているのは、東海道新幹線や東名高速道路などによる高速輸送施設の発達



第6図 一泊余暇圏



第7図 連泊余暇圏

動者数をみると、91分～150分の範囲に比較的活動者が集中するが、全時間帯にわたる。一泊観光活動は日帰観光活動に比較して、所要時間には大きく影響されず、前者が後者に比べて余暇活動に時間的な余裕があるためと考えられる。そのため、一泊型観光地が選ばれる際には、所要時間よりも観光地そのものへの選好性が優先する。

IV-3) 連泊余暇圏

本稿では、連泊余暇活動とは2泊以上の宿泊を伴う余暇活動と規定している。そのため、連泊余暇圏は余暇活動に時間的な余裕があるため、日帰余暇活動や一泊余暇活動に比較して遠距離に活動することが可能である。したがって、浜松市民の連泊余暇圏は、日本全

国に広がり、少数であるが外国にも拡大している。

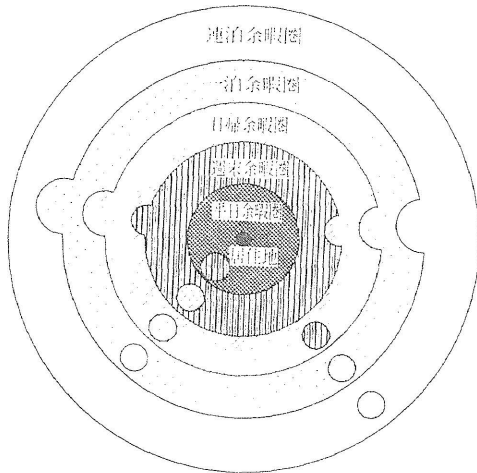
連泊余暇圏の形状をみると、日帰余暇活動地が集積した100km圏内には連泊余暇活動地が皆無である。一泊余暇活動地が多かった300km圏内では、連泊余暇活動地は、伊豆・箱根地方（稲取・下田・修善寺・箱根など）、中部山岳地方（長野・上高地など）、関西地方（大阪・奈良など）に集中する。300km圏外では、一泊余暇活動地とは逆に、西日本での活動者が多い。

日帰・一泊余暇活動がツアー型の形態をとることに對して、連泊余暇活動の形態は、リゾート型の一泊滞在所に一定期間滞在する傾向にあると考えられる。とくに、その傾向は、連泊余暇圏の300km圏内の余暇活動地における海水浴場、スキー場、避暑地、避寒地、古都巡礼地などに典型的な例がある。余暇活動時間の拡大や高速輸送機関の発達によって、連泊余暇圏が拡大するとともに、リゾート型の余暇活動が増大し、居住地に比較して近接した地点に、連泊余暇活動地が形成されることも予想される。

V む す び

本稿は、人々が余暇活動によって形成する余暇圏を、生活のリズムと居住地区の相違を考慮に入れて、浜松市の現地調査によって考察した。以上のことがらをまとめてみると、次のようにいえるであろう。

1. 平日の余暇活動は、居住地の周辺か居住地と勤務地の中間地点でなされることが多い。したがって、平日余暇圏は居住地を中心にして通勤圏よりも狭小な範囲に形成され、浜松市においては、都心地区・萩丘地区そして元浜地区のように平日の余暇機能によって結節地点が存在する。平日余暇圏の圏域の大きさには、居住地による相違がみられ、一般的には都心部の居住者ほど平日余暇圏の圏域が小さく、都心部から農村部に向かうほど圏域が大きくなる。



第8図 余暇圏の模式図

2. 週末余暇圏は、居住地を中心としてほぼ 20km 圏、所要時間60分の範囲に相当する。この圏内での余暇活動地の中核は、浜名湖周辺に行楽地、浜松市都心地区、そして近隣公園である。週末余暇圏の圏域の大きさには、居住地による相違がみられ、一般的には都心部の居住者ほど週末余暇圏の圏域が大きく都心部から農村部に向かうほど圏域が小さくなる。

3. 平日余暇圏と週末余暇圏には相互に関連がある。一般に、人々は平日の余暇活動が行えない場所に、週末の余暇活動を求める傾向がある。すなわち、都市的環境下に居住する者は、週末の余暇活動地として周辺行楽地を選好し、それに反して農村的環境下に

居住する者は、都市的環境を週末余暇活動地として選好する。

4. 観光型余暇活動は、居住地ごとに大きな差異を見出すことができなかったが、余暇活動の頻度は、農村部から都心部に向かうにしたがって増大する。

5. 日帰余暇圏は、浜松駅を中心として 100km 圏、所要時間 150 分以内の範囲に相当し、同様に一泊余暇圏は浜松駅を中心にして 300km 圏、所要時間 360 分以内の範囲にほぼ一致する。そして、連泊余暇圏は日本全体、そして海外の地域を含む広い圏域を包含する。

6. 日帰余暇・一泊余暇圏は、高速輸送機関の発達により、それぞれの圏の形状が浜松市を中心として同心円がみられ、突出した圏域部分や、飛地状の圏域が生じる。

7. 生活のリズムに対応して、居住地を中心にして、平日余暇圏、週末余暇圏、日帰余暇圏、一泊余暇圏そして連泊余暇圏という同心円状の 5 重の余暇圏の存在を認めることができる。

本調査を行うに当たっては、浜松市教育委員会、調査対象とした小学校々長・教職員、そしてアンケートに回答下さった父兄の方々には協力を得、鈴木泰之・寺門和夫・新見 治、嶋田 純の各氏には現地調査の助力を得た。また、関係官公庁には各種資料を提供していただいた。筑波大学の宮坂和人氏には製図を依頼した。研究をまとめる際には、昭和51・52年度文部省科学研究費（代表者 高野史男教授「地方都市の成立および発展の地域的基盤に関する研究」課題番号 138027）の一部を使用した。以上記して感謝したい。

註・参考文献

- 1) 中村和郎他(1976): 新しい地理学への道。人文地理, 28, 32~55.
- 2) Edward J. Taaffe (ed.) (1970): Geography. 125 p.
- 3) O. Dollfus (1970): L'espace géographique. 山本正三・高橋伸夫訳(1975): 「地理空間」120p.
- 4) 経済企画庁余暇開発室編(1973): 余暇社会への構
- 図——余暇政策の今後のあり方——. 1~2.
- 5) 近年の観光地理学の展望については、山村順次の展望〔経済地理学会編(1976): 経済地理学の成果と課題(第Ⅱ集). 203~214〕に詳しい。
- 6) 木内信蔵(1940): 本邦の温泉都市に関する二・三の問題。地学雑誌, 52, 110~125.
- 7) 鈴木富志郎(1958): 観光都市における人口移動

- 静岡県伊東市の場合—, 都市問題, 49, 87~95.
- 8) 西岡久雄(1963): 地理学及び立地論と観光研究. 日本観光学会研究報告, 2, 11~15.
- 9) 除野信道(1974): The General Equilibrium Systems of "Space-economics" for Tourism, 日本観光学会研究報告, 8.
- 10) 吉本栄一・伊藤達雄(1962): 観光産業の形成要因の分析的研究——菅平スキー場を例として——, 観光研究, 69, 55~64.
- 11) 山村順次(1969): 伊香保・鬼怒川における温泉観光集落の発達と経済的機能——温泉観光地の研究第2報——, 地理評, 42, 295~313.
- 12) 白坂 肇(1976): 野沢温泉村におけるスキー場の立地と発展——日本におけるスキー場の地理学的研究第1報——, 地理評, 49, 314~360.
- 13) 石井英也(1970): わが国における民宿地域形成についての予察的考察, 地理評, 43, 607~622.
- 14) 石井英也他(1977): 南伊豆における沿岸集落の変貌——吉佐美地区の場合——, 人文地理学研究, 1, 23~41.
- 15) 山村順次・板倉 学(1971): 沿岸漁村の観光地化——紀伊長島町の場合——, 大東文化大学経済論集, 17, 53~77.
- 16) 高橋伸夫・菅野峰明・小林浩二(1974): 地方小都市の観光地化に伴う都市化——伊豆下田市の事例——, 東京教育大学地理学研究報告, XVIII, 119~152.
- 17) 小池洋一(1960): 都市住民のレクリエーション形態とその地域的關係, 地理評, 33, 615~625.
- 18) 坂井雍子(1962): 大都市市民のレクリエーション活動の実態とその観光慰楽園——名古屋市の場合——, 観光研究, 69, 36~54.
- 19) Paul-Henry Chombart De Lauwe (1965): Des hommes et des villes. 19~44.
- 20) T.F. Saarinen (1976): Environmental Planning, Perception and Behavior. 105~106.
- 21) 予備調査は, 1974年7月に浜松市内の小学校4校を通じてアンケート調査を行った. 調査票は合計200枚配布した(回収率87.0%).
- 22) 1977年12月1日現在. 調査時点に近い1973年6月1日現在の人口数は, 432,221であった.
- 23) 本稿では, 所要時間は交通機関によるもののみを算出してある.

Leisure Activity Spaces in the City of Hamamatsu

Nobuo Takahashi and Kiyokazu Takabayashi

This study attempts to analyze leisure activity spaces which are formed by the movement of people for various leisure activities. Leisure activities differ in type and location in terms of time available. This study relates leisure activity spaces to daily, weekly, and yearly patterns of life, and to locations of people's residences within a city. This article has two purposes; (1) how do residents of different residential districts within a city form their leisure activity space? Are there any differences of leisure activity space, as the distances of the residential districts increase from the center of the city? (2) How are leisure activity space associated with the daily, weekly, and yearly patterns of life?

In order to answer these questions, questionnaires were sent in the city of Hamamatsu (population; 482,288, December, 1977), Shizuoka prefecture. The results of the analysis of the data are summarized as follows:

1. Weekday leisure activities of residents occur mainly in the vicinity of their residences or the routes between their homes and work places. Thus, weekday leisure activity spaces are smaller than the commuting zones. In the city of Hamamatsu, the city center, the Hagioka district, and the Motohama district are nodal points of weekday leisure activities. The size of weekday leisure activity space varies from place to place. Generally speaking, it is small for residents in and near the city center, while it increases for residents in the outlying areas.

2. Leisure activity space during weekends almost corresponds to 60 minute trip from the people's residences, forming a circle with a radius of 20 kilometers. Major places for leisure activities during weekends include the recreational sites around Lake Hamana, the center of the city, and

neighborhood parks. The size of leisure activity spaces during weekends also differs from place to place. Generally, the residents in and near the city center have larger leisure activity spaces, and the residents in the outlying areas have smaller leisure activity spaces.

3. Weekday-leisure activity space and weekend-leisure activity space are interrelated. Generally, during weekends people are likely to do their leisure activities in places where they can not do during weekdays. In other words, people living under urban environment prefer outlying holiday resorts as leisure activity places, while people living under rural environment prefer urban environment as leisure activity places.

4. As for sightseeing-type leisure activities, there is no difference in size of leisure activity space, in terms of locations of residents. The residents near the city center have more frequencies of leisure activities than those in the outlying areas.

5. One-day leisure activity space corresponds to 150 minute trip from the Hamamatsu station, J. N. R. line, forming a circle with a radius of 150 kilometers. Similarly, two-day leisure activity space is within 360 minute trip from the Hamamatsu station, J. N. R. line, forming a circle with a radius of 300 kilometers. Leisure activity space for more than two days is large, including whole Japan, and parts of the world.

6. One-day and two-day leisure activity spaces are concentric in form with a center at the Hamamatsu station of the J. N. R. line. Concentric patterns, however, are distorted along such good transportation networks as New Tokaido Line and Tomei Expressway.

7. Leisure activity spaces for weekdays, weekends, one-day trips, and more-than-two-day trips are found. These spaces takes concentric forms with centers of locations of residents. Therefore, these spaces reflect daily, weekly, and yearly patterns of life.